

令和3年度 人権作文集

人権の芽

第54集

子どもの人権を守り 豊かな心を育てよう

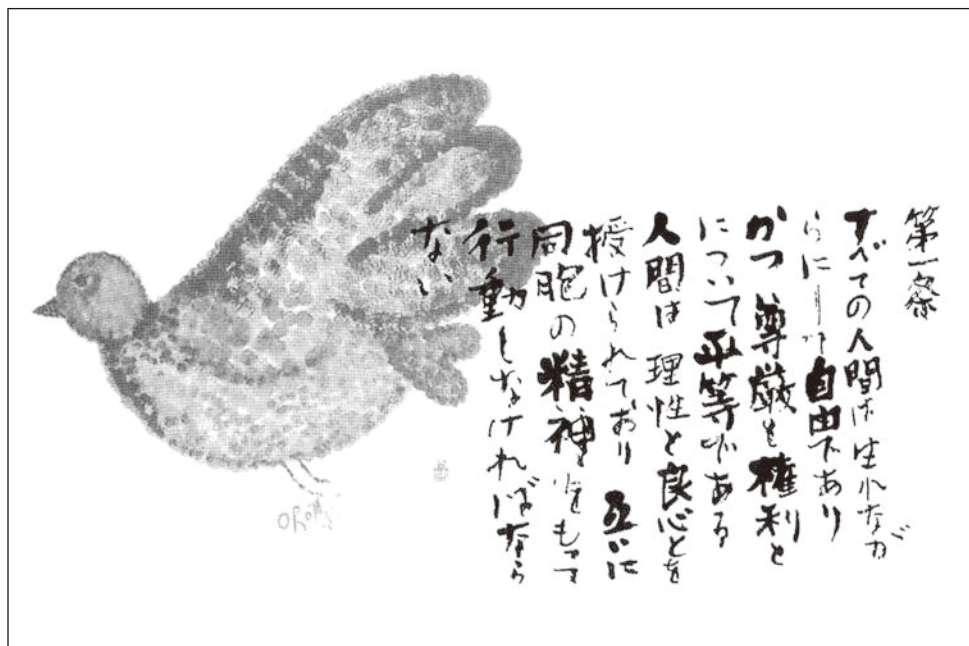


人権イメージキャラクター
「人KENまるる君」



人権イメージキャラクター
「人KENあゆみちゃん」

神戸地方法務局 兵庫県人権擁護委員連合会



世界人権宣言啓発書画

「鳥」 「自由と解放」を表わしたもの

小 木 太 法 書
オタビオ・ロス 画

世界人権宣言とは…

（一九四八年十二月十日
国際連合第三回総会において採択）

第二次世界大戦は、五、六〇〇万人を超える犠牲者を出した悲惨な戦争でした。

この厳粛な経験から、二度と戦争を起こさないためには、全世界で基本的人権が確立されなければならない、ということが理解されました。

そこで、世界各国の人々及び国が達成すべき基本的人権の基準を宣言したのが、「世界人権宣言」です。

世界人権宣言の基本にあるのは、全ての人間は生まれながらにして自由であり平等である、という理念です。

そして、基本的人権は、いかなる差別を受けることなく享有できなければならない、と宣言しています。

全国中学生人権作文コンテスト 兵庫県大会表彰式



人権イマジナリクター
「KENまもる君」

と き：令和3年12月18日
と ころ：姫路市文化コンベンションセンター
アクリエひめじ



人権イマジナリクター
「KENあゆみちゃん」



子どもの人権SOSミニレター

神戸地方方法務局と兵庫県人権擁護委員連合会では、返信用封筒と便せんを一体化した「子どもの人権SOSミニレター」を兵庫県内のすべての小・中学生のみなさんに配布しています。

身近な人にも相談できずにいるみなさんの悩みごとを、このレターに書いて教えてください。人権問題に詳しい人権擁護委員がいつしよに考えて、悩んでいるみなさんの力になります。もちろん相談内容や個人情報などの秘密は守ります。

また、「子どもの人権SOSミニレター」のほかに、電話「子どもの人権110番」やメール「子どもの人権SOS-eメール」で相談することもできます。



小学生用



中学生用



は し が き

法務省と全国人権擁護委員連合会は、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、昭和五十六年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しております。

「人権作文コンテスト」は、次代を担う中学生が、人権に関する作文を書くことを通して、人権尊重の重要性、必要性についての理解を深めるとともに豊かな人権感覚を身に付けることを目的としています。本年度の兵庫県大会は、県内二八四校から八万四七一九編もの多数の応募をいただきました。いずれの応募作品も、家庭、学校又は地域での体験や見聞を通じて、障害のある人や高齢者の問題、LGBTの人々の問題、新型コロナウイルス感染症に関連した差別の問題など、人権に関する様々な問題を真剣に考えたことが、生徒自身の素直な言葉で表現されています。それらの作品からは、人を思いやる心や優しさにあふれた気持ちを感じとることができます。

本作文集は、数次の審査を経て選ばれた作文一五編を収録したのですが、これらの作品を一人でも多くの方々に御覧いただき、人権尊重の輪がより一層広がっていくことを願ってやみません。

終わりに、このコンテストを実施するに当たり、熱意を持って取り組んでいただいた中学生の皆さん、そ

して、御指導、御支援をいただいた各中学校・特別支援学校・各市町教育委員会・兵庫県教育委員会・NHK神戸放送局・サンテレビジョン・ラジオ関西・阪神タイガース・楽天ヴィッセル神戸・コベルコ神戸スティーラーズ・西宮ストークスの皆様方、共催いただいた神戸新聞社の皆様に、厚く御礼申し上げます。

令和四年二月

神戸地方務局長 東方良司
兵庫県人権擁護委員連合会長 工藤 涼二

目次

【作文の部】

最優秀賞

アイパッチ……………	姫路市立広嶺中学校	三年	松尾彩未……………	1
私の誇り……………	高砂市立鹿島中学校	三年	松本芽唯……………	4
「干渉」ではなく「手助け」を……………	小野市立小野中学校	九年	松田祐子……………	7
過ちを繰り返さないために……………	宍粟市立山崎南中学校	二年	松岡稔音……………	10
部落差別を知り、考える……………	豊岡市立但東中学校	三年	山本真衣……………	13
兵庫県教育委員会賞				
お姉ちゃん……………	尼崎市立立花中学校	一年	近藤晴太……………	16
NHK神戸放送局賞				
弟の良いところ……………	宝塚市立宝塚第一中学校	一年	田口宗佑……………	19
サンテレビ賞				
はじめの一步……………	尼崎市立大成中学校	一年	野村百花……………	21
ラジオ関西賞				
私が髪を伸ばす理由……………	川西市立明峰中学校	三年	安井寧音……………	24

兵庫男女共同参画委員会賞

ズボンを穿いた女の子…………… 尼崎市立大庄北中学校 一年 井上 乃愛…………… 27

兵庫子ども人権委員会賞

今できることとすべきこと…………… 宍粟市立一宮北中学校 三年 進藤 花…………… 29

兵庫高齢者・障がい者人権委員会賞

障がい者への偏見…………… 丹波市立青垣中学校 三年 蘆田 颯士…………… 32

優秀賞

性別って…………… 神戸市立垂水東中学校 二年 桂 みのり…………… 34

引退直前の盲導犬と暮らして…………… 三田市立狭間中学校 二年 齊藤 萌衣…………… 37

本当の自分でいられる社会に…………… 丹波市立柏原中学校 三年 谷垣 葵衣…………… 40

奨励賞一覧…………… 43

【審査の感想】

社会のワクチン…………… 兵庫県大会審査員長神戸新聞社報道部長 小山 優…………… 46

作文の部



兵庫県大会最優秀賞
(中央大会 奨励賞)

アイパッチ

姫路市立広嶺中学校 三年

松 尾 彩 未

皆さんは、「アイパッチ」というものをご存知ですか。「アイパッチ」というのは、インターネットで検索すると、「視機能の発達期にある小児に対して行う弱視治療の一つ」となっています。それと同時に、たまご型で大きな絆創膏のような目に貼るシールの通販サイトが出てきます。私は今、眼鏡をかけていますが、近視のためではなく、屈折性弱視の治療のための眼鏡です。屈折性弱視というのは、遠視や乱視などの屈折異常が原因で視力の発達が遅れている状態です。

私は、よちよち歩き出してから走れるようになって、とにかくよく転んだり、つまずいたりしていました。今から思えば、目に異常があったからです。幼稚園で初めて眼科検診を受けたところ、私は何か目に異常があると知らされました。両親は驚いて、すぐに大きな病院の眼科を受診しましたが、そこで医師から最初に言われた言葉が、

「もう手遅れですね。弱視治療は、三歳までに始めないといけない。あとはどんどん悪くなるだけです。こちらで治療してもあまり意味がないですが、どうされますか。」

でした。両親はひどいショックを受け、何も考えられないまま、

「悪くならないように、治療してください。」とだけ答えました。

その後、いろいろな角度から弱視について調べ、小さな眼科を訪ねました。そこで検査をして診察室に入ると、医師から、

「大丈夫ですよ。片目にアイパッチを貼るという、子供にとって少しつらい治療になりますが、目は良くなっていますよ。」

と言われ、その場で母が涙を流したのを、かすかに覚えています。

それから毎日、悪い左目の視機能の発達を促すために、就寝時や入浴時以外はアイパッチを右目に装着する生活が始まりました。毎日アイパッチを一日何時間も貼っていると、すぐにテープ部分がかぶれ、痛くてかゆくて、また痛くて、治療を続けるのが嫌になりました。母が布で、目に貼らなくて良いように眼帯を作るなど、色々と試行錯誤を繰り返しました。小学生になった頃、眼鏡に装着する布のアイパッチがあることを知り、それからは毎日、それをつけて学校に行きました。アイパッチにアププリケなどをつけて、かわいいものにしてもらっていましたが、やっぱり、小さい顔に大きなアイパッチはすぐ目立ち、すれ違う人にじろじろ見られ、他の子供たちから、

「この子、何か変なもんつけとう。」

と言われ、指を差されることが日常茶飯事でした。友達のお母さんから、

「かわいそうに。つらいねえ。」

と言われ、私は思わず母に、

「なあ、彩未ってかわいいそうなん?。」

と聞きました。すると母が、

「かわいいね。の間違いちゃうか?。」

と言いました。

そういうやりとりを、今振り返ってみると、言う側は自分が目にして思ったことをそのまま発したのかもしれないけれど、言われたほうは傷付いていることもあるのだと気付きました。私はまだ小さくて分からなかったけれど、小さい体で見えにくい片目だけで一生懸命に頑張っている子供を、ひそひそと陰口を言われたり、指を差されたり、かわいそうだと言われたりすることが、そばにいた母はとてもつらかっただろうと思いました。

毎月眼科を受診して真面目に治療し、アイパッチ装着時間も短くなり、小学校三年生になった頃には、アイパッチをつけなくても良い程になりました。私の宝箱には、歴代アイパッチ八個、眼鏡九本があり、たまに眺めてなつかしみます。

私にとってはたまたまアイパッチでしたが、どこかに不自由があり、そうしなければならぬ状況にある人もたくさんいます。周りは、決して傷付けるような言動をしてはいけません。支えるということまではできないかもしれないけれど、気持ちだけは寄り添うことができます。相手の立場になって考え、思いやることで、自分も周りも温かい気持ちになれると思います。そのためには、むやみに同情するのではなく、相手と同じ目線に立って考えることが重要だと思います。

「みんなちがってみんないい」

全ての命は皆大切に、皆平等です。

兵庫県大会最優秀賞

(中央大会 法務省人権擁護局長賞)

私の誇り

高砂市立鹿島中学校 三年

松 本 芽 唯

私の母は医療従事者で、隣の市のクリニックで働いている。毎日患者さんの処置やケアに忙しそうで、疲れた顔で帰ってくる日もあるが、部活動でケガをした私や友達の処置をしてくれたり、何より仕事が好きな母を私は誇りに思い、どんな患者さんが相手でも看護ができることは、すごいなあと思っていた。

しかし、一年半ほど前、「新型コロナウイルス感染拡大」という、今までにない出来事が起きた。そして、日本や世界に感染が拡大していく中で、医療従事者とその家族が差別を受けているというニュースを見た。

「うつるかもしれないから、医療従事者の子どもは、保育園に登園させないでほしい。」

「医療従事者の方は、お店に入らないでください。」などといった心無い言葉を世間の人々は、普通に言っていた。私は、正直ショックだった。それと同時に、腹立たしい気持ちもあふれてきた。なぜ、自分も感染するかもしれない最前線で戦ってくれている医療従事者の人々がこんな言われ方をしなければいけないのか。この心無いことを言っている人たちが、もしコロナウイルスに感染したら、病院に行ってこの戦ってく

れている医療従事者の人々に処置や看病をしてもらうのではないのかと。ただ、それと同時に少し不安にもなった。私の母の勤務する病院は、コロナウイルス対応の病院ではないが、医療従事者の家族というだけで、友達と距離を置かれたり、学校に来ないでほしいと思われたりしたら嫌だなあという気持ちがほんの少しあったのは事実だ。

小学校の時、病気について調べる、という授業があり、私はハンセン病について調べた。その時、ハンセン病にかかった人への差別があつたことを知り、決してその様なことはあつてはならないと勉強した。それなのに人々はまたその様な差別をしているのである。それは、新型コロナウイルスが未知の病気で、特に効く薬もなく、有名な芸能人の人々もかつて重症になり亡くなった人たちもいるから、人々は恐怖を感じたのだろう。さらに、今はインターネットでたくさんの情報を知ることができる。しかし、その情報の中には間違つた情報や憶測にすぎない情報もたくさんあふれている。時にはその情報が差別を加速させている様にも思う。そんな時、人は不安になり、自分を最優先に考え、相手の気持ちが考えられなくなってしまうのだと思う。

この新型コロナウイルスの感染拡大が始まった頃、私の兄は受験直前が一番大変な時期だった。入試が例年通り行われるのか、その後の卒業式はあるのか。みんな不安でしかなかった。そんな時、母が言った。

「学校で、お母さんが医療従事者だと言わない方がいいかも。入試直前で大変な時に、感染していなくても、近寄りたくないとか言われたり思われたりするから。」と。すると兄はすぐに、こう言った。

「なぜ人々の処置や看病をしてきているお母さんや医療従事者の人たちが悪く言われる？おかしい世の中！それに、自分の周りには、そんなこと言う友達はいない。」と。

母は、少しうれしそうな、少しホッとした顔をしていた。私は、自分が不安に思っていたことをはずかしく思い、兄はさすがだなと思った。実際、兄の周りにも私の周りにも、母や医療従事者の人たちを悪く言ったり差別したりする人は誰もいなかった。

私は、医療の仕事は奥が深いと思う。今までにも存在したケガや病気の治療はもちろん、新型コロナウイルスの様に、未知の病気にも医療従事者の人は不安になりながらもきつと戦っているのだと思う。それが差別を理由に辞めてしまったら、患者さんはどうなるだろう。医療従事者の人たちは、命を助ける仕事を、自分の命をかけて働いている。そんな人たちを差別するのは決してはいけないことである。このコロナ禍で、いろいろな意見や考えが毎日の様に飛びかっているが、私は母の仕事について隠すつもりもないし、医療従事者であることを立派だなとこれからも思い続けることだろう。

兵庫県大会最優秀賞
(中央大会 奨励賞)

「干渉」ではなく「手助け」を

小野市立小野中学校 九年

松 田 祐 子

躍動感。その写真には、この言葉がよく似合うと思った。床を踏む足からはタンゴのリズムが、服のしわからは激しさが伝わってくるようだった。そこには、ダンスをする一人の男性が写っていた。その人こそ、私のおじだ。

私が初めておじに会ったのは2歳のとき。そのときからおじは、つえなしでは動くことができなかった。二十年前に遭った事故が原因だ。もともとは大会で何度も優勝するようなダンサーであつたおじだが、今はダンスをすることはおろか、目の前にあるテーブルの上のお水を取ることも、本を読むことも難しい。私はそんなおじの助けになりたいと思っている。お水が取りづらいなら手が届くところに渡してあげたいし、本が読みづらいなら、ページを開くお手伝いをしたい。けれどおじは「自分でするよ」と言つて、大変そうにしながらも自分一人ですようとする。

また、今のおじの職業はダンス教室の取締役だ。大好きだつたのにやめるしかなかったダンス。叶えなかった夢を諦めることしかできない自分自身の体。その教室に来るのは、健全な体でダンスをすることがで

きる人たちだ。おじが諦めなければいけなかった夢を、かなえられる可能性をもった人たちなのだ。そのような人たちの近くにすることが、おじはつらくないのだろうか。私だったらたえられない。その人たちを見ていることさえつらい。けれどおじは毎日楽しそうに仕事へ向かう。私とおじの間には、一枚の見えない壁があるようだった。私といえるときにだけ作られる、おじが作った壁が。私にとっておじは不思議な人だった。

ある日、おじとお婆と一緒に食事に行ったとき、おじがコップを取りづらそうにしていた。私は手助けをしようと思ったけれど、おじとの間に壁を感じていたため、行動に移すことはできなかった。お婆が助けてくれるだろうと思い、おじを見つめていたがお婆が手助けをすることはなかった。私は冷たいと思った。障害により取りづらいつと知っているのに。抗議する気持ちでお婆を見ると、お婆もおじを見つめていた。おじがコップを自分で取ると安心したように食事を再開した。そのときのお婆の目は、とても優しくかった。そしてとても温かかった。お婆は冷たいどころか、おじをいつでも手助けできるよう見守っていたのだ。おじとの間にある壁。それはおじが作っていたわけではなく、私が作っていたのだ。障害があるからと全てができないわけでは決していない。自分でできることだってたくさんある。それなのに私は、障害があるからという自分勝手なイメージで、必要以上の手助けをしていた。そしてその手助けは、手助けとは呼べないのではないだろうか。それは干渉だ。私は知らず知らずのうちに干渉をし、おじを傷つけていたのだ。

おじのような障害がある方が一番嫌なのは、「障害者」という勝手なイメージを押しつけられることだ。障害者だからできないことが多いだろう。障害者だから夢を諦めなくてはならなかった。だからつらいはずだろう。このような押しつけが障害のある方の妨げとなる。おじが自分で物事を行おうとするのも、毎日楽

しそうに仕事に向かうのも、周りの人たちのおかげだ。ダンサー時代はダンスのパートナーとして。今は一生を共にするパートナーとして、おばはおじのそばにいる。ライバルだった人は、今は次の世代を育てる良き仲間としておじの周りにいてくれている。いろいろな人が形を変えながらも、おじの周りで接してくれている。手助けをしてくれているのだ。

おじの今の夢は、自分のダンス教室に通ってくれている人たちの夢がかなうことだそう。周りの人たちが形を変えながらも自分のそばにいてくれたことで、夢の形も変えられることに気づいた。そううれしそうに話してくれた。そのときのおじの顔を今でもよく覚えている。障害者だからといった勝手なイメージを拭い去った世界はとても美しかった。その美しい世界をいろいろな人に見てほしい。今の社会は公共施設にユニバーサルデザインが使用され、障害がある方にも住みやすいものだ。また、自分一人では手助けできないと思っていた人たちが、障害がある人の手助けを、気軽に行うことができる。そんな社会だ。けれど、それは果たして「手助け」なのか。一度考えてみてほしい。自分勝手なイメージの押しつけは障害がある方の負担となるだけだ。「干渉」ではなく「手助け」をする。そんな風に、一歩下がるだけで見える世界の美しさを、尊さを私はたくさんの人に伝えたい。それが私にできることだから。教えてもらった私だからこそできることだから。

兵庫県大会最優秀賞

(中央大会 法務省人権擁護局長賞)

過ちを繰り返さないために

兵庫県立山崎南中学校 二年

松岡稔音

岡山県瀬戸内市。街から見える瀬戸内海は日本のエーゲ海といわれており、豊富な海の幸、かんきつ類の栽培も盛んで、海に沈む夕日はとても幻想的です。そんな瀬戸内の海に浮かぶ美しい島々の一つに、かつて国の政策によって隔離されていた長島という島があります。本州からわずか三〇メートルしか離れていない島です。現在は橋が架かり、自由に行き来することができますが、橋が架かるまでは簡単には行き来することができない島でした。

皆さんは、ハンセン病という病気を知っていますか。「らい菌」という病原菌が皮膚や末しょう神経を冒し、目、鼻、のど、口などの粘膜、一部の内臓にも病変が生じる病気です。らい菌を発見した医師の名にちなんで、ハンセン病という病名が用いられています。日本では不治の病、遺伝する病と言われ、古くから恐れられていました。実際には感染力は非常に弱く、周りに感染することはほぼありません。今では治療薬も開発され、確実に治る病気です。そんなハンセン病の患者が入所する日本で最初の国立ハンセン病療養所が開設されたのが、長島です。一九五三年に日本で制定された「らい予防法」では、治療薬が発見されていた

にもかかわらず患者を強制的に療養所に隔離し、回復しても社会復帰は遠ざけられていました。「長島愛生園」には、多い時は二千人以上が入所し、現在も一二四名が暮らしています。

私は、父に連れられて何度か長島を訪れたことがあります。療養所での交流会に参加し、お菓子を食べながら入所者のおじいさん、おばあさんとお話をしました。病気の後遺症で顔や手に変形が残っている方々でした。二人は、私を孫のように喜んで迎えてくれました。子どもを温かく迎えてくれるのは、子や孫がいないからです。いないというより、持つことができませんでした。子どもを産んではいけないと、国の法律で定められていたのです。また、赤ちゃんが来た時は、抱っこすることをためられるそうです。治っていることは分かっていますが、これまで受けた差別や偏見によって、そのような思いになられるようです。

二〇〇五年には、全国の療養所で何十年も瓶に入れられたままだった胎児や新生児の遺体とみられる標本が一一五体発見されたことも、父から聞きました。なんてひどいことをするのだと心が痛みました。ごく最近になって「らい予防法」がようやく廃止され、国が隔離政策の過ちを認めて謝罪と補償が行われ、家族にも同じ苦しみを与えたとして国が責任を認めたことも教えてもらいました。ハンセン病の問題は決して昔の話ではなく、間違った認識や差別心のために、今でも苦しんでいる方々がおられるのです。もしハンセン病のことをよく知らない人がおじいさんやおばあさんの変形した顔や手を見たら、現在の社会でも差別的な態度をとる人もいるかもしれません。おじいさんやおばあさんはこれまでずっと差別を受け続け、生きるものしんどくなるくらいのつらい思いをしてこられたのだと思うと、どうしてこんなことが起きているのだろうと悲しくなりました。

長島と本土をつなぐ橋は、「人間回復の橋」と呼ばれています。本土からすぐ手の届く距離にありなが

ら、長く社会から隔離された療養所と本土が自由に交流できるようにと架けられた橋です。ハンセン病の患者さんやその家族の方たちは、長い間、多くの偏見と差別に苦しんできましたが、島と本土がようやく橋でつながり、隔離時代の終わりを象徴するものとして「人間回復の橋」と呼ばれるようになりました。今、世界では新型コロナウイルスの影響で人と人が分断されています。感染によって、回復したとしても周りから責められ、そこに住めなくなるということも聞きます。そのような差別や偏見が起こるのは、病気について正しく知らないからです。私は、おじいさん、おばあさんとの交流や父から教わったことで、ハンセン病について知ることができました。過去の出来事から学ぶことは、ハンセン病だけでなく、この先に同じ過ちを繰り返さない社会をつくることにつながるはずです。差別されている人たちが人間として回復するのではなく、すべての人が正しく知ることによって差別をなくし、互いの人間としての関係を回復させていかなければなりません。「人間回復の橋」は、偏見や差別によってできた人と人との心の隔たりをつなぐ橋なのだと、私は思いました。

その橋を渡って、長島のおじいさんとおばあさんに会いたくなりました。そして瀬戸内のきれいな海を、もう一度一緒に見たいです。

兵庫県大会最優秀賞

(中央大会 法務省人権擁護局長賞)

部落差別を知り、考える

豊岡市立但東中学校 三年

山 本 真 衣

先日、授業で部落差別について学びました。私は、その時初めて部落差別というものを知りました。なぜ、その土地で生まれただけで差別を受けなければならないのだろうと疑問に思ったと同時に、今でもそんな概念に囚われている人がいると知り、とても驚きました。

私は、日航機墜落事故で亡くなられた田中愛子さんについて学習しました。この悲惨な事故から十九年後の二〇〇四年に、愛子さんのご遺族の元に一通の手紙が送りつけられたそうです。それは、

「日航機墜落事故の原因がやっとわかった。航空機事故は被差別部落の愛子に乗っていたため起こった。穢れをもった愛子に乗っていたため起こった。」

というものでした。私は、こんなところまで部落差別があることに驚いたし、絶対に許せないことだと思いました。

しかし、この手紙を見た愛子さんのご遺族は、

「この人自身に罪はありません。差別の歴史がきちんと教えられなかったのです。ゆがんだ偏見だけを植え

付けられた、いわば犠牲者なのです。」

と言われたそうです。この言葉に、私ははっとしました。なぜなら、私はこんな手紙を送ってきた人が悪いと思っていたし、私が田中さんの立場だったら、送ってきた人に怒りや憎しみを覚えると思うからです。しかし、田中さんは人ではなく、差別そのものや、差別を残している社会に怒りを感じているのかなと思いました。だからこそ、差別をする人も正しい知識を得ることで、変わっていくことができる考えたのだと思いました。私は田中さんの考えに気付いたとき、知らないということは怖いことだなと思いました。

愛子さんは、部落差別に直面しても、自分の生き方に誇りをもって生きようとされていました。また、愛子さんの絶筆の中にある、「今、光っていたい」という言葉に感動しました。人は、つい10年、20年先のことを考えてしまうけど、今生きているそのときを大切にしたいという考え方にとっても共感したからです。私も、限りある命の中のかげがえのない時を大切に生きたいと思いました。

私は、愛子さんについて学習して、部落差別が今でも根強く残っていることや、それをなくそうと努力されている方がいることを知りました。そして、部落差別は自分には直接関係ないと思ってしまう部分がありました。でも、それも深刻な差別問題なのかなと思いました。部落差別は、被差別部落出身の人や、その周りの人だけでなく、日本国民全員が関係する問題なのだと思います。なぜなら、差別をしている人に正しい知識を伝えることが必要だからです。だからこそ、私のように自分には関係ないと思っている人も、自分にも関係のある問題として捉えるべきだと考えました。

人を出身地で判断するのは絶対にあってはならないことだし、許されないことです。私は、差別をなくすために、もっと差別や人権について学び、理解を深めていく必要があると思いました。そして、間違った認

識をなくし、正しい知識を広めることが大切だと思いました。私の周りでは、自分たちで人権について考え、標語やポスターを書いたり、授業で考えたりしています。これからもこのような活動に積極的に取り組み、人権に対する意識を高めていきたいです。差別をなくし、誰もが笑顔で生きられる平等な社会をつくっていくためには、「差別があることを認識し、向き合う」ことがとても重要です。遠い存在として考えるのではなく、自分のこととして捉えることが、差別をなくす第一歩だと思います。私も、思いやりの心を忘れず、自分にできることから行動に移したいと思います。

お姉ちゃん

尼崎市立立花中学校 一年

近 藤 晴 太

僕のお姉ちゃんは視覚障害者です。

僕が小学三年生の時、お姉ちゃんの病気が発症しました。お姉ちゃんは中学一年生の時、黒板が見えにくくなり、メガネをかけ始めました。体は元気で、陸上部に入り、短距離の選手として頑張っていました。ところが中学二年生になると、小さな文字が見えにくくなったので、近くの眼科で診てもらいました。しかし、原因がわからず、いろいろな大きい病院をまわることになりました。なかなか原因はわからなかったけど、わかったときには、視力が0・03以下で視野が半分だけになっていました。

元気で明るかったお姉ちゃんの笑顔がいつの間にか消えてしまいました。一人で安全に学校に行くことも、友達と一緒に教室で勉強することもできなくなり、学校にいけない日が続きました。僕はその姿を見ていたけれど、一度も声をかけることができませんでした。

その後も入院し、治療をしました。視力は戻りませんでした。立花中学校では、このまま学校生活を続けた。みんなと勉強したりすることが難しいことがわかりました。そして、中学二年生の三学期、視覚特

別支援学校という、目の不自由な人たちが集まる学校へ転校しました。

お姉ちゃんが転校したばかりの頃は、今までの友達もいない慣れない環境に行かないといけないこと、病気が治らないことが、かわいそうだと僕は思っていました。その時のお姉ちゃんの気持ちを聞いたことはありませんでした。

お姉ちゃんの学校では、毎年弁論大会というものがあります。お姉ちゃんは、今年の近畿盲学校弁論大会で三位に選ばれました。その原稿を見せてもらったときに、初めて、僕はお姉ちゃんの想いを知ることができました。そこにはこう書いてありました。

「今まで自分が障害者を持っていたイメージが間違っていたことに気付きました。それは『かわいそう』というイメージです。（中略）私は障害のある人と健常者がもっと身近で過ごし、お互いを知り合うことが大切だと思います。私はそのための力になりたい。かつて健常者だった私だからこそ、伝えられることがあると信じています。」

お姉ちゃんは今、神戸の学校まで白杖という杖を持ち、通っています。勉強するときは、拡大読書器とiPadを上手く使いこなしています。

今までみたいに友達と遊びに行ったり、僕や兄弟とケンカをしたり、テレビを見て笑ったり、ふつうの高校生と変わらないような生活を送っています。

病気や障害者などのハンディを抱えている人や貧しい人に対して「かわいそう」と思うことは悪いことではないと思います。それはそれぞれお姉ちゃんのようにつらい時期があったと思うからです。そして、「かわいそう」という同情で終わらず、自分に何ができるかを考えることが大切だと僕は思います。

僕ができることとしたら、募金をしたり、お姉ちゃんのように視覚障害の人が困っていたら声をかけたりすることなどだと思います。

そして、これからもお姉ちゃんのことを理解し応援していきたいです。

弟の良いところ

宝塚市立宝塚第一中学校 一年

田 口 宗 佑

ぼくには小学四年生の弟がいる。弟には障害がいろいろな特性をもっている。弟は、気になることや、気に入ったことを何度も聞いてくる。このやり取りが、大好きだからだ。例えば、いつも自分のことを好きか？と聞く。ぼくは、いつも「好き」と答えるが、何度も聞いてくるから時々めんどうくさくなる。けんかをした時「嫌い」と言ったらすごく悲しそうな顔をした。心がズキツとした。ぼくは、弟をキズつけてしまったなと後悔した。弟は、「好き」と言ってもらうと、とびきりうれしそうな顔をするのを知っていたからだ。

弟にとって何度も同じことを聞くやり取りは『あいさつ』なのだ。自分の気持ちをうれしさと満たすあいさつなのだと思う。弟はあいさつが好きだ。「おはようございます」や「こんにちは」、「ごめんなさい」が素直に大きな声で言える。ぼくは、あいさつは嫌いではないが少し苦手だ。大きな声で言えたら気持ちがいいとは思うけど人見知りだし、タイミングや自分からすすんですることにとまどうことがある。あいさつは誰にでもできることのように、できなくてしんどくなる人だっていると思う。だから、自然にあいさつで

きる弟はすごいと思う。でも、あいさつは、元気に大きな声で言うのだけが良いものなのか。恥ずかしくてできない時、気まずい時、タイミングがずれた時、どうしたらいいのかわからない時もある。そんな時にかぎって「ちゃんとあいさつしなさい」と言われてしまう。元気に大きな声では無理だけど、小さな声でなら、頭を下げるだけなら、少し笑うだけならできることもある。それはあいさつにならないのか？立派なあいさつだと思う。気持ちは伝わると思う。だからあいさつは大切だ。今日も元気だな、ぼくもがんばるぞ、気持ちはいいな嬉しいなという気持ちにお互いになる。

ぼくは弟を見ていて何気ないあいさつがこんなに大切で気持ちが伝わるんだということがわかった。だから、弟はすごいと思う。障害があるからできないこともあるが、弟にしかできないこともある。みんな同じことだったとくさんできる。最初は弟をかわいそうと思っていたが、今はすごいと思う。弟の障害は個性だと思う。弟にしかない素敵な個性だから、これからも弟は弟のままでいいと思う。ぼくにも、ぼくにしかない特別な個性があるはずだ。だから、ぼくはぼくをもっと好きになりたい。みんなちがってみんないい、ぼくはぼくでいいんだと自信をもとうと思う。まずは苦手なあいさつを自分なりにできるあいさつをすること、克服していこうと思う。そして、弟のようにあいさつでたくさんの人に気持ちが伝えられる人になりたい。まだまだ弟には見習いたいところがたくさんある。自分より小さくても教わることがたくさんある。最後に、ぼくは、こんな素敵な個性をもった弟と兄弟であることを誇りに思う。これから、弟が困ったり、つらくなったりした時にはいつもそばで力を貸してあげたいし、一緒に悩んで、乗り越えていきたいと思う。

サンテレビ賞

はじめの一歩

尼崎市立大成中学校 一年

野村 百花

私は、近所の人に会えば、必ず挨拶をする。これは、親から口うるさく言われているということもあるけれど、単純に挨拶というものが好きだからでもある。いわゆる”子供のうち“は挨拶をするだけで褒められるもので、私は褒められるのが大好きだ。

以前、マンションのエントランスで時々見かける若い女性がいた。金髪に派手な服装で、少し近寄りがたい雰囲気だった。郵便受けの前で、初めてその女性を見かけた時、私はいつものように「こんにちは。」と声をかけた。しかし、その人は挨拶を返してくれないばかりか、顔も上げなかった。

次に見かけた時も、私は「こんにちは。」と声をかけた。前回のことを思い出して少し大きめの声で挨拶をしたが、やはりその時もこちらを見ようとしなかった。少し嫌な気持ちになって、足早に通り過ぎた。その後も何度かその女性を見かける機会があったが、どうせ無視されるだろうと思うと、小さな声でぼそぼそと挨拶風のことをつぶやきながらうつむき加減でさっと通り過ぎるだけになった。

ある日、また郵便受けの前でその女性を見かけた。ベビーカーの中の赤ちゃんに話しかけていたのだが、

その言葉は不明瞭で、その人が使っていたのは手話だった。その瞬間に、私はそれまでの自分の浅はかさに気づいたのだけれど、すぐに挨拶することが出来なかった。その時、その人がこちらを見てニコツと笑い、指を立てた手をおでこの前に持っていた後、軽く会釈をした。私は少しどぎまぎしながらぺこりとお辞儀だけして急いで通り過ぎた。

初めてその人に挨拶した時、私はたまたま聞こえなかったのかなと思った。その通り、聞こえなかったのだ。でもそれは、たまたま、などではなかった。

次に返事がなかった時、たまたま聞こえなかったのではないならわざと無視したのだと思い込んだ。この時の私には、この二択しかないように思えていた。他の可能性として、耳が不自由な人なのかもしれない、とは思わなかったのだ。それは、身近に同じような人が居ないからというだけのことかもしれない。でもそれ以上に、その人の派手な見た目と私の持つ障がい者のイメージが重ならなかったせいなのではないか。そういう差別心が自分の中にあつたのではないか。と覚えて、少なからずショックを受けた。

後日、本で調べたらあの時のジェスチャーは、「こんにちは」という意味の手話だった。次に会えたら、手話で挨拶を試みようと思ったのだが、その女性はすぐに引越してしまい、叶わなかった。それは残念だったが、この出来事をきっかけに、いくつか簡単な手話を覚えたので、いつか使う時が来るという。

障がいには、見えやすいものと見えにくいものがあると思う。

人と接する時、コミュニケーションがうまくいかなくても、まずは相手に何か事情があるかもしれないと考えることは大切だ。障がいの有無だけでなく、自分の知っていることや感じたことが全てではない、と知ることが視野を広げるきっかけになると思う。

障がいとは、生まれつきのものばかりではない。今は障がいを持たない人も、怪我や病気でいつ障がいを抱えることになるか分からない。広い視野を持って、相手に心を寄せることが、障がいのある人もない人も穏やかに暮らせる社会を作る第一歩だと思う。

ラジオ関西賞

私が髪を伸ばす理由

川西市立明峰中学校 三年

安井 寧 音

私は今、髪を伸ばしている。このことを友達に話すと「ロングヘアっていいよね。」や、「アレンジ樂しめるよね。」と言われたことがある。もちろん、私もそう思う。だが、私が髪を伸ばす一番の理由はそうではない。私はなぜ髪を伸ばしているのか。それは、「ヘアドネーションをするため」である。

皆さんは「ヘアドネーション」をご存じだろうか。ヘアドネーションとは、小児がんなどで頭髪を失ってしまった子どもたちのために、寄付された髪の毛でウィッグを作り、無償で提供する活動のことだ。もともとはアメリカで行われていた活動で、日本では二〇〇九年からNPO法人「JHD & C」が活動を開始した。ヘアドネーションを行っている団体に髪を寄付すれば、その団体の中でウィッグが作られ、子どもたちに届けられるという流れだ。

私が寄付を行った団体「JHD & C」のヘアドネーションの条件としてまずいちばんに挙げられるのは、三十一センチメートル以上の長さがあることだ。この長さは、頭をすっぽりと覆えるウィッグに用いる毛髪の世界基準である十二インチを、センチメートルに換算したものだそう。三十一センチメートル以上の長

さがあれば、年齢や国籍、性別、髪色、髪質を問わず誰でも寄付が可能だ。

私がヘアドネーションを知ったのは、小学二年生の夏。何気なくテレビを見ていたときだった。見ていた番組ではヘアドネーション特集をしていた。その当時、ヘアドネーションの知名度はまだまだ低く、私も全く知らなかった。だが、私はそこでこれからも忘れることがないであろう人物を目にした。それは、一人の女子高校生の方だった。

ヘアドネーション特集に出ていたその女子高生の方を仮にAさんとしよう。Aさんは、笑顔がすてきで、かわいい人だった。しかし、その番組に登場してきたAさんは、深くニット帽をかぶっていた。当時の私には、その帽子的意味が分からなかった。しかし、番組が進んでいく中でAさんが帽子を取ってくれた。Aさんには、髪の毛がなかった。彼女はがんだった。

「抗がん剤治療で髪の毛が全部抜けてしまったんです。」

と彼女は言った。彼女は笑顔だったが、どこか悲しそうで、寂しそうだった。私は衝撃を受けた。そして、Aさんは言った。

「見た目を気にせずにおしゃれがしたい。」

その番組のラストで、ヘアドネーションを行っている団体からAさんにウィッグが届けられた。鏡の前でウィッグをつけたAさんは、とても嬉しそうに泣いていた。髪をかわいく結んで幸せそうに笑うAさんが、私には輝いて見えた。そして私はその時決意した。絶対に私もヘアドネーションをする、と。

当時の私は髪が肩までしかなかったため、髪を伸ばすのに三年もかかってしまった。そのため、初めてヘアドネーションをしたのは小学五年生の夏だった。そこから、中学一年生の夏と今年の春休みの計三回、へ

アドネーションをした。何の前振れもなくいきなり髪をばつさり切ったので、その度に友達を驚かせてしまった。しかし、ヘアドネーションをしたことを伝えると、「すごいね!。」と言ってもらえたり、「私もやってみようかな。」と興味を持つてくれた子もいたりした。私はそれを聞いてとても嬉しくなったのだ。

ヘアドネーションをするようになり、新たに知ったことが一つある。「一体のウィッグをつくるために必要なヘアドネーションの量」だ。私はヘアドネーションをするまでに、五人分ぐらいの寄付があればウィッグができると思っていた。しかし、気になって調べてみたところ、なんと一人分のウィッグを作るためには約三十人から五十人分のヘアドネーションが必要だということを知った。ウィッグの長さによつてはそれ以上必要なこともあるそうだ。

ヘアドネーションのウィッグを注文しているのは、ほとんどがセミロングかロングヘアのフルウィッグを希望している女の子たちだそう。ロングヘアのフルウィッグを作るには、五十センチメートル以上の寄付が五十人から七十人分ほど必要になる、ということを最近初めて知った。そして、五十センチメートル以上の寄付は、需要としては一番高いものの、現在の供給は一番少ないそうだ。私が今までした寄付は長くても四十センチメートル程だ。なので、次は五十センチメートル以上の髪を絶対に寄付しようと思う。

ヘアドネーションは、髪を失ってしまった子どもたちが「自分らしく生きる」ための活動だと思う。ヘアドネーションを通して、自分らしく笑顔で過ごせる子どもたちが増えることを願う。少しでも子どもたちの力になりたい。だから私は、髪を伸ばすのだ。

ズボンを穿いた女の子

尼崎市立大庄北中学校 一年

井 上 乃 愛

「なんでズボンなん？」私が制服のズボンを穿いていると、周りの人からよく質問される。女子の制服はスカートとズボンから選択できるのに、なぜこのような質問をされるのだろう。この出来事をきっかけに、私はジェンダーについて考えてみようと思った。

女友達に制服について聞いてみると、「制服でズボンは嫌やろ。」という意見がとて多かった。本当はズボンを選択しなかったが、両親に反対されてスカートにしたという、女友達もいた。私服で女性がズボンを穿くことは普通なのに、制服になると男はズボン、女はスカートという、固定観念にとらわれている人が多いのだと気付いた。私は防寒対策として冬服はズボンを選択したが、校舎内や、町中を歩いているとちらちら見られることもあり、本当にズボンを選択して良かったのかな、と少し考えてしまった。

男性らしさ、女性らしさは、身に付けている衣服などの見た目で決まるのか？そもそも男性らしさ、女性らしさが必要なのか？私はどれだけ考えても答えが出ない。私は性別や見た目にとらわれず、人間らしさを大切にしたいと思う。人間を男と女に二分するのではなく、人を思いやる心を持った人間として魅力を感じ

る人と、性差なく親しくするというような交友関係を築いていきたい。

私は現在、同性の子に好意を抱いている。その好意は、友情とは異なる感情だ。私にとつての友情とは、本音で話することができて信頼でき、ありのままの自分を見せることができる人に対する感情だ。友情以上の好意を感じる人とは、もっと一緒に居たいしつらい時には助け合い、楽しい時には共感し合うような関係になりたいと思う。母はジェンダーに対する偏見を全く持たない人で、私が小学生の頃から「彼氏でも彼女でもないよ。」とよく言っていた。そのような環境で育ったので、同性に好意を抱くことは私にとつては自然なことだった。母に伝えた時も、「ふうん。バレンタインあげるん？」というような反応だった。ジェンダーについて調べていると、親にカミングアウトした際、悲しまれたり、反対されたりすることがあると知った。私には本音で話し受け入れてくれる母や親友がいる。それは、とてもありがたい幸せなことであると思う。これからも、人間を性別ではなくその人自身で判断して、恋愛を楽しんでいきたいと思う。

私が今回ジェンダーについて考え気付いたことは、性別とは自分の力で変えられないものであり、人間の分類のために与えられているだけのものではないかということだ。性別という変えられないもののせいで、衣服や相手からの認識等も決めつけられ、自由を奪われてしまう。世間や周囲の意見のせいで、自分の意志や意見を否定され続けるのはおかしいと思った。私は自分自身のことは、肉体的にも精神的にも女性だと思っている。しかし女性に生まれて良かったか、と考えるとまだわからない。私はズボンを穿いた女の子で、恋愛対象は女の子。いつか様々な選択肢があたり前に受け入れられ、みんなが笑顔で心をさらけ出して生きることのできる日本になればいいなと、心から願う。

兵庫子ども人権委員会賞

今できることとすべきこと

宍粟市立一宮北中学校 三年

進 藤 花

すぐに終わると思っていたコロナウイルスの感染は今だに拡大し続け、部活動や学校行事などが中止や縮小されています。さらに、夏休み中でも旅行や買物にも行けず、「コロナのせいで…」と恨みばかり。しかし、そう思うだけでは感染拡大は防げません。感染が終息したらマスクを外して話したい、いろんな所に行きたいと思うなら、すべきこととできることがあるのではないかと考えました。

私が考えるすべきこととは、テレビや新聞で報道されているように、手洗いやうがい、手指の消毒、マスクの着用、三密を避ける、不要不急の外出をしないなど、コロナウイルスの感染拡大を抑えるために私たちが絶対にすべきことです。

一方、コロナ禍で生まれたのが「コロナ差別」です。感染した方やその家族、感染者が多い地域に対して心ない言葉を言ったり、家に石を投げつけたりしているというニュースを見ました。感染した方が感染対策を行っていないかったと勝手に決めつけるので、退院後に帰宅しにくいとか安心して生活できない、さらには怖いなどと思わなければならない状況があるようです。感染した方は、コロナウイルスそのものに対する不

安と、差別されるかもしれないという、二つの不安を抱えながら治療し、生活しなければなりません。

そこで、私たち中学生にもできることはないかと考えて、生徒会執行部を中心に、「シトラスリボンプロジェクト」に取り組んだのです。この活動を通して「お帰り、ただいまが言い合える町」を目指し、まず全校生徒でシトラスリボンを作りました。また、「差別や偏見なくそう集会」と題して、差別や偏見の具体例やなぜ差別や偏見が生まれるのかを、動画やスライドを使い、わかりやすく伝えたのです。もちろん、この集会に限らず、全校集会ではお互いの間隔を大きくとるなど、普段の学校生活で私たちができることはたくさんあります。さらに、市内の各中学校でも消毒の「5プッシュ運動」や寸劇による差別防止運動、ポスター制作などの取組を行っています。

私たちは、これらの取組が私たちにできることだと考え、コロナ差別で苦しむ人や差別する人が少しでも減るようにと願い、毎回意見を出し合って実行してきました。その中で私は、差別しないだけでなく、差別を防げる人間になりたいと思うようになったのです。私たちの取組が学校から地域へ、さらにそれ以上に広がり、コロナ差別の解消に役立てばと願わずにはいられません。

今、全国的にSNSでの差別・偏見が拡大している事実もあります。SNSの情報は、コロナウイルスの地域の感染状況や店舗や映画館、行きたいところの混み具合などがわかってコロナ禍での日常生活に必要なものがあり、便利な一面があります。しかし、悪意による誹謗・中傷で人を傷つける凶器となっている事実も見逃すわけにはいきません。また故意ではなくても、不確かな情報がデマとして拡散されたり、感染した方へのアンチコメントが増え続けたりしているそうです。そういう社会の状況に対して私たちができることは、ほとんどないかもしれませんが、少なくとも身の回りの差別や偏見をなくしたり、なくすための動きが

広がるようにアイデアを出したり取り組んだりすることは可能です。

学校の二期は、運動会や文化祭を始め、多くの人が集まったり参加したりする行事があります。私は生徒会執行部として、また生徒の一人として、誰もが楽しく、安心・安全な状況で参加するために、これまで学んだことを活かしたいと考えています。もちろん、これまでの取組は継続していきますが、みんなの知恵を集結して新しい取組に挑戦し、まず私たちの学校で、コロナウイルス感染拡大とコロナ差別の防止を強化していかなければなりません。

いつかマスクを外して話したり、机を寄せ合って楽しく給食を食べたりできる普通の学校生活が戻り、最終的には、全校生全員で心から校歌を歌って卒業したいです。そのためにも、今できることとすべきことは何なのかを常に念頭において、残りの中学校生活を過ごしたいと考えています。

兵庫高齢者・障がい者人権委員会賞

障がい者への偏見

丹波市立青垣中学校 三年

蘆田 颯士

みなさんは、「障がい者」と聞くとどんなことを思いますか。また、障がい者を見るとどんなことを思いますか。人それぞれ思うことは違うと思います。そして、その思ったことが、無意識のうちに表情や態度に出ているかもしれません。

ぼくは、トゥレット症候群という病気です。体が勝手に動いたり、勝手に声が出たりする病気です。症状が出だしたのは小学校1年生くらいの時からで、年々症状はひどくなっていきました。

初めは軽い症状からでした。首をふったり肩をすばませたりする動きぐらいでした。その時は周りの人に迷惑をかけるようなことはありませんでした。しかし、だんだん色んな症状が出てきて、教室でも机をどんだんたたいてしまったり、声が出てしまったり、給食をこぼしてしまったりといった症状が増えてきました。

小学校だったある日、担任の先生がぼくの病気のことについて、クラスみんなに話してくださいました。最初は嫌だったけど、先生が話された後、クラスみんなは病気のことを理解してくれて、ぼくは安

心して学校生活を送ることができるようになりました。小学校が統合してからも、中学生になってからも、同級生のみんなは優しく接してくれました。

しかし、傷ついたこともたくさんあります。例えば、電車の中。体が動いたり、大きな声を出してしまった時、周りの人たちは決まって変な目でぼくを見えます。何度も見えます。外食するのに飲食店に行った時も、机をたたいてしまいます。コップもひどく机にたたきつけてしまいます。すると、やっぱり周りの人は変な目でぼくを見えます。「ぼくだって、したくてしてるんじゃない。」といつも腹が立ってしまいますが、どうすることもできません。きつと、周りの人は無意識のうちに、変なものを見るような目つきになっているのかもしれない。でも、その視線がぼくにはすごく痛いのです。優しくしてくれとは思いません。ただ、「いろいろな人がいるんだよ。」とみんなが思える世の中になればいいのになと思うだけです。

ある日こんなテレビを見ました。テレビには、ぼくと同じトウレット症候群で悩む男性が出ていました。男性は、病気のせいでいじめにあったり、周りの人に変な目で見られたりして苦しんでいました。でも父親の転勤でアメリカに行った時は違ったそうです。アメリカは、個性を尊重する国なので、自分の病気を言うと「ああ、そうなんだ。それじゃ仕方ないね。」と普通に接してくれるらしく、周りを気にせず生活できたそうです。

日本もそんな世の中になったら、ぼくみたいな普通じゃない人も、楽しく生活できるはずです。いろいろな人がいて当然なんだと、みんなが思えるようになったら、みんなが幸せになれると思います。

性別って

神戸市垂水東中学校 二年

桂 みのり

私は以前、照明に関係する仕事をしたいという夢をもっていた。照明に興味をもったのは小学校六年生の時に行われた習い事の発表会の時だ。みんなの発表をよりきれいに、幻想的に、時には刺激的に変える照明に魅了された。それがきっかけだ。あんな風に色々な雰囲気を作りだせる人になりたいと思い、照明に関する仕事について調べ始めた。

仕事内容は、実際に照明機材を操ってステージや会場に光を放つ。そして、照明機材の搬入やセッティング、撤収作業などを行うことだ。一日中働きっぱなしになることが多い。さらに調べていくと、「照明の設置には体力が必要だから女性は向いていない。」とか、「一日中働きっぱなしだから女性には体力的にも精神的にもきつい。」などと書かれた記事を多く見つけた。

私はこれらの記事を読んで少し違和感を持った。なぜなら、女性という性別を否定されたように感じたからだ。確かに、体力的にも精神的にもきつい仕事なのは仕事内容から分かるが、女性だから向いていないことではないと思う。「体力がない」のは、女性だからではない。男性でも体力があまりない人もいれば、女性

でも体力がある人はいらる。「精神的にきつい」から女性に向いていないという表現からは女性だから精神的に弱く、男性だから精神的に強いように聞こえるが、そんなことはないと思う。メンタルが強い女性もいれば、弱い男性もいるだろう。

私は、一人一人の個性や特技、能力は性別では決して決められるものではないと思う。分かりやすい例が好きで、女性には赤やピンク系の色が好きで、男性は青や黒系の色が好きというイメージがあるが、実際のところはどうか。私の周りには黒や青、紫、紺色が好きだという女性もいるし、赤や黄色、オレンジ色が好きだという男性もいる。確かにイメージ通り赤やピンク系が好きで女性もいるし、青や黒系が好きで男性もいる。私がこのことから言いたいのは、性別によるイメージは個人とは全く関係のないことだ。

では、なぜこのようなイメージができてしまったのだろうか。私は小さい頃、「女の子だからもう少しおしとやかにしなさい。」とか、「女の子だから家事を手伝いなさい。」とか言われることがあった。皆さんも、「男の子だから泣くな。」とか、「男の子だから堂々としていなさい。」とか言われたことはないだろうか。女性はおしとやかで優しく、かわいらしくて繊細。男性は堂々としていて秩序を保ち、かっこよくて大胆。私たちはこのようなイメージをもっている。人は自分にないものを求め、必要とする。このことから私は、男性や女性にもつイメージは男性が女性に、女性が男性に求める理想だと思った。だが、人によって得意なことや苦手なことは違ふし、好みもそれぞれだ。理想をもつことは大切だが、このような理想の押し付けはあつてはならないと思う。

それは、照明に關係する仕事にも同じことが言えると思う。性別によるイメージは個人とは全く關係の

ないことだから、「体力が必要だから女性には向いていない。」のではなく、「体力がある人に向いている。」この表現のほうが合っているのではないだろうか。それに、この表現のほうが前向きな気がしないだろうか。体力が少ないなら運動をして体力をつけられればいい。「女性だから」という生まれた時からきまっている、性別を否定するような表現は人を傷つけることがある。それは、照明の仕事について調べただけではなく、いろいろなところで起きているだろう。例えば、男性は「育児よりも仕事」という固定観念があるため育児が取りにくかったり、女性は「結婚や出産等で会社を辞める人が多い」から管理職や役職につかせてもらえなかったりする等があげられるだろう。

私は、性別によるイメージや固定観念によって働きにくいことや、過ごしにくい場所や場面があつてはならないと思う。みんなが、その人個人の性格や特徴、得意なことなどを理解し、尊重しあうことが大切だと思った。

引退直前の盲導犬と暮らして

三田市立狭間中学校 二年

齊 藤 萌 衣

ニュースで「盲導犬の引退と、その後」という番組を家族で見た。引退間近の盲導犬とユーザー。引退後、パピーウォーカーさんのお宅で老後を過ごす内容だった。ユーザーさんが「ありがとねー。楽しい思い出ばかりだわ。」「あなた帰っちゃうのね。長生きするのよ。」と盲導犬に声をかける姿が、我が家に近々訪れる別れの日と重なりさみしくなった。

しかし、その後、コメンテーターの言葉に衝撃を受けた。「盲導犬として大変だったろうから、最後は引退犬ボランティアさんの所で楽しい日々を送ってほしいですね。」と言うような一言があつて涙ぐんでいた。

彼の涙に、私は混乱してしまった。盲導犬としての暮らしは、世の中から見て、とてもつらい日々なのだろうか。私は、我が家の盲導犬がつらい日々を送っているのを見て見ぬふりをしているひどい人間だと思われるのだろうか。兄に尋ねると、落ち着いた声で、

「世の中のには、まだ、そう考える人が多いんじゃないか？小学生とかは、盲導犬の一生についていろいろ

勉強しているけど。逆に大人の方が、盲導犬に対して思い込みで話していること、多いんじゃないかな。盲導犬が協会から貸し出されている犬だってことも、知らへんかもしれんで？」

という答えが返ってきた。兄が抱っこしている大きなラブラドルレトリバーは、父と外出すれば、父を安全に誘導してくれる、とても頼りになる盲導犬だ。しかし、家の中では、大きなワンコとしてウロウロしている。何か気になれば頭を突っ込んで来て「ヤジ犬が来たー」と盛り上げてくれる。涼感マットは苦手なめくってしまふし、眠くなったら「歯みがきしてくれー」と言わんばかりに追いかけてくる。十歳の引退の時期を過ぎてから、なんだか、さらに自由に暮らしているなーと思って、私は盲導犬を見ている。

引退を控えた盲導犬と暮らしている私は、八年間共に過ごしても、最後の時間までを一緒に暮らすことはできない、ということを理解している。本当はこの春、兄の卒業式が、盲導犬と父との最後と想っていた。しかし、緊急事態宣言の影響で、なかなか訓練が進まず、我が家の盲導犬の引退が延び、夏休みも一緒に過ごすことになった。思いがけず、長い時間を盲導犬と仲良く過ごすことができてうれしい。

私の卒園式から、父のパートナーとして一緒に暮らしている盲導犬は大切な家族だ。彼女との別れについては、小さい頃から聞かされていた。盲導犬は、全盲の父に貸与されている犬である。元気なうちに引退させ、その後は普通の犬として楽しい毎日を過ごせるように準備があること。たくさんの人が、盲導犬を育てること。最後の時まで見守ってくれること。ユーザーの我が家は、一番長く暮らす場所ながら、最後の家族にはなれないこと。だからこそ、元気に引退を迎えさせ、次の家族とも楽しい時間を過ごせるよう、盲導犬の健康に気を配ろう。そんな話を聞いて育った。

私と盲導犬は、姉妹みたいな、友達みたいな不思議な関係だ。私は盲導犬の彼女に、エサをあげたこと

も、おやつをあげたこともない。それは盲導犬を迎えるユーザーの家族として幼稚園の時にした約束だからだ。私と彼女は、ロープを引っ張り合い、追いかけてっこをする。他の家族とは違う幼なじみのような関係だ。離れると思うと、とてもさみしい。

盲導犬のお世話は、ユーザーの父しかできない。朝六時にトイレ、朝ごはん、そしてブラッシングが始まる。父が八年間続けている日常だ。私が自分の支度をしている間に、ピカピカの盲導犬も仕上がる。幼稚園の送り迎えも参観日も、盲導犬は父を学校に導いてきてくれた。仕事から帰り、ハーネスを外すと、私を追いかけて、遊ぼうと誘ってくる。ただし、気分がのった時だけ。おやつがもらえる関係でもないので、本当に遊びたい時だけワイワイ騒ぐ。それが、私と彼女との関係だ。

盲導犬が協会に戻っている時、我が家の生活は少し崩れる。朝寝坊、夜更かししてしまいがちだ。外出には父に肩を貸して手引きする人が必要になる。盲導犬が一緒だと、家族について来るので、父は自分のペースで歩くことができる。彼女がいないと家族のメンバーが足りない感じがする。盲導犬が我が家に戻って、しっぽをふって全部屋を巡回し、走り回っている姿を見ると「おかえり！元気に帰って来てくれてうれしいよー。」と思う。

ユーザーの家族にとっても、盲導犬は大切な家族だ。「盲導犬の大変な日々」と言われるとつらい。ユーザー家族の真ん中で、たくさんの楽しい思い出を作ってくれているよ、写真もいっぱいだよ、と知ってほしい。この先、別れることは決まっているが、楽しい日々を送れるよう、元気でいてくれるよう家族みんなが盲導犬をフォローしようと思う。

兵庫県大会優秀賞

本当の自分でいられる社会に

丹波市立柏原中学校 三年

谷 垣 葵 衣

先日、父と靴を買いにスポーツ用品店に行きました。気に入った靴が見つかり、店員さんにサイズが少し大きい靴があるか尋ねると、もう一足別の靴も一緒に持ってこられました。違う色のものもあると、紹介するのかなと思っていた私は、店員さんの言葉に違和感を覚えました。

「レディースはこちらです。」

買おうとしたのは、「メンズ」と表記されていた商品です。私が思ったのは、メンズもレディースも気にしなくていいのに、「レディースだから」と紹介する必要はないということです。店員さんは、無意識だっただろうけれど、LGBTQやLGBTsのように多様な性がある中でそのその発言には、傷つく人もいるのではないかと思いました。そして、もしかしたら私も、知らないうちに誰かを傷つける発言をしていたかもしれないと思いました。

私は小さいとき、スカートやワンピースのように、ひらひらしたピンクの服を着る、髪をくくるなど、「女の子っぽい」と言われることをするのが好きでした。それがいつからか、服は黒か紺色にジーンズ、ス

カートのなんてありえない、髪は短い方がいいなど、「男の子っぽい」と言われることの方が好きになりました。「かわいい」よりも「かつこいい」に興味があり、周りの女の子と何か違うところがあることに違和感がありました。私は、心と体の性は同じだけれど、価値感や好みが違うことで、周りの目や反応を気にしてしまい、友達と関わりにくいと思うことができました。今では、私以外にも同じような友達がいることを知り、「自分らしさ」として捉えられるようになったので、「私らしい私」で毎日楽しく過ごせるようになりました。

今、日本に限らず世界では、性の多様性が重視され、LGBTQやLGBTSに対しての意識が大きく変わってきています。国によっては同性婚が認められたり、東京オリンピックでは男性から性転換した方が女性として出場してたりします。学校の制服は、ズボンかスカートかを選べるところが増えてきています。このように、選択ができるようになった、選択の幅が広がったという点では、以前よりは自分らしさが出しやすい社会になってきたと思います。

しかし、選択ができるようになっただけでは、自分らしさが出しやすい社会になったとは言えないと思います。自分らしさを出すということは、周りの人が自分に対して持っているイメージとは違う姿を見せるということです。そして、それはものすごく勇気がいることで、周りの目や反応を過剰に気にしてしまいます。それでも、勇気を振り絞って自分らしさを出した人を前に、私たちは受け入れる準備ができています。しょうか。

私は、スカートをはいて学校生活を送っていますが、本当はズボンをはきたいと思っていました。スカートかズボンか選べるということは分かっていたのに、ズボンをはくという選択ができなかったのは、やつ

ぱり周りの目を気にしたからです。ズボンをはいて学校に行ったら、周りにばかにされたり、「女の子はみんなスカートををはいているのに一人だけ」と、変な目で見られたりするのではないかと不安に思いました。

私が選べるのに選べない経験をしたように、同じような経験をした人がたくさんいると思います。LGBTQはLGBTの人の体験を調べてみると、「『本当に着たい服』と『実際に着られる服』がある」「本当に気に入った服を堂々と着たい」のように、体の性と心の性が違うから好きな服が着られないという声や、「普通を演じることで自分を守っている」「本当の自分を隠して生きている」のように、自分らしく生きられないことは、生死にまで関わるくらいのことだという声がありました。彼らは、私たちが自分らしさを出しにくい雰囲気を作っていることで、本当の自分を隠すしかないのです。そして、それに気づかない私たちが無意識に傷つけ、また自分らしさを出せなくすることにつながるのだと思います。

私は、誰もが「本当の自分」でいられる社会にするためには、相手をよく知り、その人その人の「自分らしさ」を受け入れる、またその準備をすることが大切だと思います。男女で分けなければならぬところは分けて、分ける必要のないところは、男女の選択肢をなくしたり、新たな選択肢を増やしたりするとよいのではないかと思います。病院では、体のつくりの違いで、男女の区別はしなければならぬかもしれないかもしれません。服や靴は男女で体の形が違いますので、メンズ、レディースと分ける必要もあるかと思うけれど、男女の区別のない「ユニセックス」の商品を広めるとよいと思います。公共施設では、更衣室や浴室、トイレなど、男女の性別に縛られない選択肢をもっと増やしていく必要があると思います。

【奨励賞】 26 編

作 品 名	学 校 名	学年	氏 名
「いじめをなくすために」	神戸市立原田中学校	3	山本朱夏
障害について	神戸市立王塚台中学校	1	西林真幌
知ることではなく「差別の種」	西宮市立苦楽園中学校	3	山川夏音
あたりまえを壊して	西宮市立浜脇中学校	3	近藤夏梨
祖母からもらった大切なもの	西宮市立甲陵中学校	1	細見芽衣
想像力が思いやりを生む	西宮市立塩瀬中学校	2	鎌田明日香
すべての人の生きる権利	川西市立東谷中学校	2	福庭彩稀
心配せんと長生きしてや！	川西市立東谷中学校	3	田畑沫葵
違い	明石市立望海中学校	2	田中美羽
理解することの大切さ	明石市立野々池中学校	1	碓井さくら
私にとっての障がい者	三木市立緑が丘中学校	2	杉本花音
HAPPY WORD ～笑える言葉は世界を救う！～	丹波篠山市立篠山中学校	2	松村湊平
僕の姉は発達障害	淳心学院中学校	2	山下雄史
助けることは優しさか	姫路市立香寺中学校	3	小野ほのか
ピンクが好きで何が悪い	姫路市立豊富小中学校	7	永井悠人
みんなが暮らしやすい社会へ	加古川市立平岡南中学校	3	宮嶋未来
高齢者と私	高砂市立荒井中学校	1	小川明夏
バリアフリー	高砂市立宝殿中学校	3	橋本永輝
個性を認め合って	小野市立河合中学校	9	森本愛梨
相手の立場に立って考える	加西市立北条中学校	3	衣笠風凜
「配慮」と「優しさ」	兵庫県立大学附属中学校	3	宮地娃衣
一人ひとりが必要な存在	近畿大学附属豊岡中学校	1	小林茉珂
見た目問題	新温泉町立夢が丘中学校	2	松井 瞬
「普通」って何？	南あわじ市・洲本市 組合立広田中学校	2	志貴凜叶
人と接するうえで大切なこと	淡路市立一宮中学校	3	田淵琳菜
病気になってよかったこと	淡路市立岩屋中学校	1	菱谷有真

審査の感想



〈審査員〉

兵庫県教育長

NHK神戸放送局放送部長

サンテレビジョン報道スポーツ局報道部長

ラジオ関西報道制作局報道制作部長

神戸新聞社編集局報道部長

兵庫県人権擁護委員連合会長

兵庫男女共同参画委員会委員長

兵庫子ども人権委員会委員長

兵庫高齢者・障がい者人権委員会委員長

神戸地方務局長

(順不同)

社会のワクチン

兵庫県大会審査員長
神戸新聞社報道部長

小山 優

人権の物差しは、時代とともに変わっていきます。変わっていかねばならないとも言えるでしょう。皆さんの作文を読み、改めてそのことを考えさせられました。

審査したのは令和三（2021）年。新型コロナウイルスはまだ終息していません。松本芽唯さんは、医療従事者である母を通じ、人類が初めて接するウイルスが、人の心に深刻な影を落としていることを指摘しました。命を守る医療を支えている人たちを遠ざけようとする言動はもつてのほかです。困ったことに、自分や家族を感染から守りたいという当たり前の心理が冷静さを失うと、誰かを攻撃したり、おとしめたりすることにつながりかねないのです。

その根深さは、松岡稔音さんもつづっています。かつて国の法律で強制的に隔離され、社会から遠ざけられたハンセン病患者を取り巻く環境を取り上げました。既に感染力も低く、治る病であることが分かっていますが、根付いた差別の心を取り除くのは容易ではありません。松岡さんの作文が評価できるのは、実際に現地を訪れ、交流した経験に基づいていることです。説得力が違います。

今年は、東京五輪・パラリンピックが開催されました。コロナ禍で開催の賛否が割れましたが、パラリン

ピックでは、社会と障害がある人たちとの関係を改めて見つめ直すきっかけになりました。どうあるべきか。松田祐子さんの作文に一つのヒントがあります。障害があるおじへのサポートが、お婆と違うことで、障害者のイメージを勝手に決めつけていたことに気づきます。独りよがりな決めつけから答えは出ないのです。

松尾彩未さんは、屈折性弱視の治療のため、左目にアイパッチというばんそうこうのようなものを貼っていました。幼い子の小さな顔には目立ちます。友達のお母さんから「かわいそうに」といわれたことに、疑問を感じます。ささいな言葉が、相手を傷つけることになっていないか。時々立ち止まって、考えてみるとよいでしょう。「かわいいね。の間違いちゃうか？」と変換したお母さんのやわらかく、強い言葉にも心を打たれました。

言葉には力があります。ただし、よいことばかりではなく両面あります。山本真衣さんの作文は教えてくれます。日航機墜落事故の被害者遺族のもとに、穢れを持った人が乗っていたのが原因という手紙が届きました。その被害者は同和地区出身者。遺族は「ゆがんだ偏見を植え付けられた、いわば犠牲者なのです」と、責めませんでした。両方の言葉で、山本さんは、正しい知識を知り、伝えることの大切さに気づきました。

コロナの悪影響が拡大しています。人の交わりが減っていることが気がかりです。顔が見えないと、相手を思いやる心が薄れます。家族や同級生、地域の人たち、遠くにいる人たち。広く思いやる心を持ち続けることが、人と人を分断し、社会までむしばまれることを防ぐワクチンになると信じています。

Kids Room

(法務省きっずるーむ)



子どもの人権 SOS-eメール

https://www.jinken.go.jp/soudan/PC_CH/0101.html



子どもの 人権110番

<https://www.moj.go.jp/KIDS/jinken110/>



人権擁護局の LINE

アカウント
@JINKEN01



人権擁護局の フェイスブック

<https://www.facebook.com/HumanRightsBureau.MOJ/>



人権擁護局の ツイッター

アカウント
@MOJ_JINKEN



人権擁護局の フロントページ

<http://www.moj.go.jp/JINKEN>



新型コロナウイルスは人を選びません。

誰もが感染する可能性があります。

正しい知識を持ち、心ない誹謗中傷や誤った情報の拡散はやめましょう。

STOP!
コロナ差別



人権イメージキャラクター
「人KENまもる君」



人権イメージキャラクター
「人KENあゆみちゃん」

新型コロナウイルス感染症に関連する不当な差別、偏見、いじめ等の被害に遭った方からの人権相談を受け付けています。

みんなの人権110番

(全国共通人権相談ダイヤル)

ゼロゼロみんなのひゃくとおぼん

 **0570-003-110**

受付時間 平日午前8時30分～午後5時15分

インターネットでも相談を受け付けています

インターネット人権相談受付窓口URL

<https://www.jinken.go.jp/>

PC、携帯、スマホ共通です。

インターネット人権相談

検索



神戸地方法務局 兵庫県人権擁護委員連合会

❖ 人権問題のご相談はお近くの法務局・人権擁護委員へ ❖

相談は無料で、秘密は固く守られます。

❖ 常設相談所

- ☐ 神戸地方方法務局人権擁護課・神戸人権擁護委員協議会
〒650-0042 神戸市中央区波止場町1番1号 Tel 078-392-1821
- ☐ 神戸地方方法務局西宮支局・西宮人権擁護委員協議会
〒662-0942 西宮市浜町7番35号 Tel 0798-26-1302
- ☐ 神戸地方方法務局伊丹支局・伊丹人権擁護委員協議会
〒664-0881 伊丹市昆陽1丁目1番地12 Tel 072-779-3454
- ☐ 神戸地方方法務局尼崎支局・尼崎人権擁護委員協議会
〒660-0892 尼崎市東難波町4丁目18番36号 Tel 06-6482-7417
- ☐ 神戸地方方法務局明石支局・明石人権擁護委員協議会
〒673-0891 明石市大明石町2丁目4番25号 Tel 078-912-5564
- ☐ 神戸地方方法務局柏原支局・柏原人権擁護委員協議会
〒669-3309 丹波市柏原町柏原516番地1 Tel 0795-72-0176
- ☐ 神戸地方方法務局姫路支局・姫路人権擁護委員協議会
〒670-0947 姫路市北条1丁目250番地 Tel 079-225-1926
- ☐ 神戸地方方法務局加古川支局・加古川人権擁護委員協議会
〒675-0017 加古川市野口町良野1749番地 Tel 079-424-3555
- ☐ 神戸地方方法務局社支局・北播人権擁護委員協議会
〒673-1431 加東市社539番地2 Tel 0795-42-0201
- ☐ 神戸地方方法務局龍野支局・龍野人権擁護委員協議会
〒679-4167 たつの市龍野町富永879番地2 Tel 0791-63-3270
- ☐ 神戸地方方法務局豊岡支局・豊岡人権擁護委員協議会
〒668-0024 豊岡市寿町8番4号 Tel 0796-22-2703
- ☐ 神戸地方方法務局洲本支局・洲本人権擁護委員協議会
〒656-0024 洲本市山手1丁目2番19号 Tel 0799-22-0497

相談時間はいずれも月曜日～金曜日（休日を除く）午前8時30分～午後5時15分まで

❖ 特設相談所

市役所や町役場で開設しています。
日時などはお近くの法務局におたずねください。

❖ 外国語人権相談ダイヤル



0570-090911

月～金曜日（休日を除く） 午前9時～午後5時まで
対応言語 中国語、韓国語、英語、フィリピン語、
ポルトガル語、ベトナム語、ネパール語、スペイン語、
インドネシア語、タイ語

発行 令和4年2月1日

発行所 神戸市中央区波止場町1番1号
神戸地方法務局 兵庫県人権擁護委員連合会
TEL078(392)-1821(代) FAX078(392)-0180

印刷所 〒651-0094 神戸市中央区琴ノ緒町1丁目5-9
株式会社 旭成社

禁転載

この作品集の作品を地方公共団体が広報誌に掲載したり、
学校が教材に使用される場合は、神戸地方法務局人権擁護課
(078-392-1821代表)まで、連絡してください。



人権イメージキャラクター
「人KENまわる君」
「人KENあゆみちゃん」

ひとりで悩まずにご相談ください

人権に関する問題でお悩みの方は、
お近くの法務局・地方法務局又はその支局までご相談ください。



電話でのご相談（平日 8：30～17：15）

みんなの人権110番

差別や虐待、パワーハラスメントなど、様々な人権問題についての相談電話です。電話は、おかけになった場所の最寄りの法務局・地方法務局につながります。

※ PHS・一部の IP 電話等からはご利用できない場合があります。

子どもの人権110番（通話料無料）

いじめ、虐待など、子どもの人権問題に関する専用相談電話です。

女性の人権ホットライン

配偶者・パートナーからの暴力やセクシュアル・ハラスメント等、女性の人権問題に関する専用相談電話です。

※PHS・一部の IP 電話等からはご利用できない場合があります。

みんなの人権110番

ゼロゼロみんなの ひやくとおばん



0570-003-110

子どもの人権110番（通話料無料）

ゼロゼロななの ひやくとおばん



0120-007-110

女性の人権ホットライン

ゼロナゼロの ハートライン



0570-070-810



インターネットでのご相談

インターネット人権相談受付窓口URL

<https://www.jinken.go.jp/>

PC、携帯、スマホ共通です。

インターネット人権相談

検索

